

第44回(2019年度)北海道建築賞

堀尾浩建築設計事務所
堀尾 浩殿

作品名一「重箱(ちょうそう)の家」

第44回(2019年度)北海道建築奨励賞

室蘭工業大学
山田 深殿

作品名一「カトリック東室蘭教会聖堂」

以上

2019年度の北海道建築賞委員会は、前年度6名の委員から1名を残して新たに6名が加わった7名体制で進められた。第1回委員会を4月25日に開催し、表彰規定や審査日程、審査方法などを審議した。また応募作品は自薦による応募のみとし、委員会からの応募推薦を行わないことを確認した。

第2回委員会は、応募締切後の5月20日に開催した。ここでは、作品審査に関わる学会倫理規定と審査方法を確認した上で、応募のあった以下の13作品すべてを審査対象とすることとした。なお、応募作品に委員が関与するものがあったため、日本建築学会の定める『3.3.20論文・作品発表の場におけるピアレビューに関する倫理規定』に則り、その委員は当該作品の審査時には退席し、選考には一切関わらないものとした。

応募作品および設計者（応募順 敬称略）

- ① 下川町まちおこしセンター コモレビ（小倉寛征／（株）エスエーデザインオフィス一級建築士事務所）
- ② 重箱（ちょうそう）の家（堀尾浩／堀尾浩建築設計事務所、長谷川大輔／（株）長谷川大輔構造計画）
- ③ 札幌市旧三菱鉱業寮保存活用（川上雅彦、宮越達也／北電総合設計株式会社）
- ④ 当麻町役場（海藤裕司、柴田俊介／（株）山下設計北海道支社、横山雅行／（株）柴滝建築設計事務所）
- ⑤ カトリック東室蘭教会聖堂（山田深／室蘭工業大学）
- ⑥ 富良野の異形屋根（高木貴間／高木貴間建築設計事務所）
- ⑦ 藤女子大 北16条キャンパス チャペル棟（飯田隆弘、緒方祐磨、鈴木博幸／三菱地所設計）
- ⑧ HakoBa 函館 -THE SHARE HOTELS-（齋藤貴之、後藤靖昌、伊藤貞治／（株）フィールド）
- ⑨ 苫小牧港開発株式会社 本社ビル（国立篤志、佐藤正博、後藤なつみ／清水建設株式会社北海道支店一級建築士事務所）
- ⑩ 札幌市円山動物園 ゾウ舎（松本渉／（株）大建設 札幌事務所、萱沼良男／（株）大建設 東京事務所）
- ⑪ さっぽろ創世スクエア（村尾忠彦、佐藤健、朝山宗啓、北條豊、藤平隆裕／（株）日建設計、中村友紀、中川陽介、小林隆行、阿久津翼／（株）北海道日建設計）
- ⑫ 札幌市立中の島小学校（佐藤教明、嘉村武浩／（株）日建設計、濱口芳郎、小谷卓司／（株）北海道日建設計）
- ⑬ 北見市立留辺蘂小学校（菅原秀見、岩村友恵／（株）北海道日建設計、嘉村武浩／（株）日建設計）

例年通り「先進性」「規範性」「洗練度」の3項目を基本的な評価軸として審査を進めることを確認した

上で、以上の応募作品より現地審査対象作品の選考を行った。その結果、評価の高かった②重箱（ちょうそう）の家、④当麻町役場、⑤カトリック東室蘭教会聖堂、⑩札幌市円山動物園ゾウ舎、⑪さっぽろ創世スクエアの5作品を選定した。現地審査は7月18日に④、8月20日に⑤、8月21日に②、⑩、⑪を行った。

第3回の委員会（8月21日開催）では、現地審査を行った5作品を対象として最終選考を行った。作品の審査にあたり、一人の委員の関与が認められる作品があったことから、主査判断により当該委員は議論には加わるものの採決の段階以降では退席するものとした。まず5作品に対して委員全員が評価を述べつつ議論を深めた。その後の採決で高い評価を得られなかった④当麻町役場と⑪さっぽろ創世スクエアを賞の対象から外した。続いて残りの3作品についての再度の議論と採決を行った結果、⑩札幌市円山動物園ゾウ舎を賞の対象から外し、最終的に北海道建築賞に②重箱（ちょうそう）の家、北海道建築奨励賞に⑤カトリック東室蘭教会聖堂とすることを委員同意のもとで決定した。

「重箱（ちょうそう）の家」は、札幌市中央区の緑豊かな斜面地に建つ家族4人のための住宅である。設計者は近年人と外部環境のつながりをテーマにした住まいを追求しているが、そこで得られた技術や経験が遺憾なく発揮された作品となった。薪ストーブを生かして上昇気流を促す入れ子状の断面計画、内部と外部を複数の境界で緩やかにつなぐ平面計画によって全体の骨格をつくり、そこに自身が磨き上げてきた環境技術やローテク素材、職人技術を生かしたディテールなどを柔軟に掛け合わせることで、時間の移ろいととも外の様子を感じることができる空間がつくられた。外壁面積と開口部面積を抑えた暖房負荷削減の手法を踏襲しつつ、季節の光や風を効果的に取捨しながら空間全体に光ムラ、温度ムラを作り出し、生活の居場所を選択するきっかけを生みだしている。環境性能を確保するために断熱材の厚さや設備スペックのみに頼るのではなく、設計者とクライアントが時間をかけて感覚をすり合わせながら過剰な設備を排していくことで実現した作品である。冬の厳しい北海道ではリスクを伴う挑戦でもあるが、新しい開放性に向けての試みとして高く評価し、北海道建築賞とするものである。

「カトリック東室蘭教会聖堂」は、室蘭市の中島公園に近い緑多い環境にある教会堂の建替えである。事務機能などが別棟であるためここでは礼拝機能に特化した聖堂のみが求められた。非常に厳しい建設コスト条件の中で、設計者は少ない手数で可能な限り豊かな空間体験をつくりだした。外壁材の道南スギによる武骨なたたずまいに対して内部は平滑な光の空間であるが、このコントラストにまず驚かされる。さらに内部空間では、合理的な架構システム、少ない開口部による十分な明るさ、効果的に光を反射する天井形状、対流を生み出す断面形状と気積の確保といった様々な要素を統合するために、単純な十字形平面を採用してすべてを解決する手法がとられている。

その結果無駄なものはぎとられ、光が作り出す抽象的な内部空間となった。一方で礼拝のためのみならず日常のコミュニティ空間としても使いやすいスケールであることが意識されている。利用者の減少や高齢化が進むなかで、地域開放の可能性を排除しなかったことはこれからの公共性の高い建築の一つの在り方であろう。以上を高く評価し、本作品を北海道建築奨励賞とするものである。

「当麻町役場庁舎」は、地方の小規模な庁舎建築の規範となる工夫が随所にみられる。特に平屋空間の中央に執務ゾーンをまとめたコンパクトな構成を採用したことで、見通しの良さと職員のコミュニケーションのしやすさが図られたことは大きく評価された。一方、この執務室を覆うために選択された地場産小径木による架構が大きな特徴であるが、3.6mピッチに設けられた柱とオフィスレイアウトの関係に必然性がみられなかった。また庁舎と一体化する既存のコミュニティ施設（同じ設計者によるもの）との関連が曖昧であることが指摘された。

「円山動物園ゾウ舎」は、ゾウの生育のための環境を確保し、その生育を見せる飼育展示のための施設である。ゾウのための環境づくりや行動を誘発する様々なアイデアが随所に見られ、飼育チームと設計者が一体となってアイデアを積み重ねた熱意が伝わる。しかし計画全体がゾウの環境づくりに傾注するあまり、観覧者にとっての経路やストーリーの作り方、建築を含めた背景の作り方がやや凡庸に終わったことが惜しまれる。

「さっぽろ創世スクエア」は、30年近くにわたる事業プロセスを経て札幌のシンボルとなる新しい風景をつくりだした。多岐にわたる機能を洗練された複合施設にまとめあげた手腕に対する評価が高い一方、全体の構成はややバランスを欠いたものになってしまった。1階クリエイティブモールやパサージュ空間は人の息吹が希薄な茫漠としたオープンスペースとなった。また多面舞台と約2,300の客席からなる劇場は上階に窮屈にレイアウトされた結果、北面、東面に圧迫感のある巨大な外壁がつくられ、創成川以東の街区に対して背を向けた閉鎖的な表情であることが指摘された。

(文責：加藤 誠)

「重箱（ちょうそう）の家」

札幌市円山動物園界隈の幹線道路から山側に折れ、緩やかな坂道を70mほど奥に進む。地形を生かし、樹齢の長さを感じさせる庭木を相互に借景する、ゆったりとした住宅地の角地に、重箱の家が現れる。

本作品は木造2階建である。その外周は3辺を敷地境界線に、1辺を敷地内に入り込んだ斜面の等高線に合わせている。2辺は「下屋」と外部の部屋のような「外間」という性格の異なる2つの深い軒下空間を生み出し、その内側に正方形に近い平面をもつ屋内空間を形成している。

屋内空間は吹き抜けとスキップフロアによる構成で、収納やサニタリー以外に閉鎖的な部屋がない。吹き抜けが1階の「広間」の上部や、室内と外気を隔てる4周の壁に沿って天井に至る。一方、床の高さが異なり腰壁のみを配した2つの「スペース」が中間階を形成し、箱状に壁を巡らせた2階の「小部屋」を挟む。この小部屋は4周の壁から離れて吹き抜けに囲まれ、広間の上に張り出す。床に無垢のフローリング、壁に珪藻土を用いた反面、外装にトドマツ材や木毛セメント板、内装にラワン合板や合成樹脂の中空板など、質素とされる類の素材も巧みに扱う。合板の木目を出隅で連続させ、板材を目透かしで納め、釘頭を隠すなどの繊細な配慮が高い洗練度を後押ししている。

本作品の屋内で夏の審査の際に実感し得た、緩やかな空気の流れと涼しさは、控えめな開口部とトップライトの適切な配置による効果である。冬場の主暖房は、平面の中心から4尺半ほど北に偏芯し、小部屋の真下に設置した薪ストーブ1台による。設計者はその放射熱を小部屋の床に当て、4方の吹き抜けに分散させ、上昇気流により屋内全体を穏やかに暖める仕組みを考案した。壁面の広い面積を占める珪藻土による、四季を通じた調湿効果も考慮したという。「薪ストーブを朝と夕に焚き、昼と就寝時には消すリズムが最も快適」「4周の壁沿いに下降気流を感じない」という住み手の声と、設計者が実測した温度分布のデータの双方は、空間的な規範を確立し得たことの裏付けといえよう。

一般的な部屋名を排した、開放の程度が異なるひと続きの空間には、住み手が集い、または互いに距離を取ることのできる、固有性の高い場が随所にある。たとえば薪ストーブを設置した土間と広間の段差は、腰掛けて語らうのにちょうど良い。広間から2つのスペースを直接結ぶ階段と肋木梯子を経て、2つの動線が次第に閉鎖性を増して小部屋に到達する奥性と、両動線をあわせた循環動線が共存する空間配列は、施工の要求でもあった家族構成の変化にたいする回答といえる。

振り返れば住宅の中央に吹き抜けを配した「空方の家」から約10年が経つ。設計者はスキップフロアという手法を繰り返し、後に火で暖をとるという原初的な行為を加えた環境的な快適性と、固有性の高い場を内包した自由度の高い間取りの複合的效果

を探究してきた。その末に、吹き抜けと居室の位置関係を反転した本作品によって、新たな規範を創出するに至った。そこに作品の先進性を見出しうるのに加え、一連の作品を通して、強烈な作家性を標榜することから一線を画す姿勢を貫いてきたことも、本委員会では高く評価したことも書き添えたい。

（文責：植田 暁）

「カトリック東室蘭教会聖堂」

室蘭市内の住宅地に建つ、木造平屋建て延床面積50坪強のカトリック教会聖堂である。

シンプルな矩形の身廊から、祭壇背面の十字架を掲げる奥行きのある浅いヴォリューム、両側面の香部屋と控え室にあてられたヴォリューム、身廊の祭壇と向かい合う側によって、全体が、伝統的なキリスト教会聖堂の型である十字形を抽象化した構成となっている。祈りの場に求められる、祭壇と十字架への意識の集中が高まる内省的かつコンパクトな空間を担保しつつ、白い天井面が、設計者の言葉を借りれば、“花が開くように”四方に緩やかに折れ上がり、その天井面に、天空から差し込む直接光と、周囲の建物の色をたたえた反射光による日々の移ろいが淡く映しだされることによって、穏やかで心地よい空間の広がりが生まれている。

外壁材には、3種類の幅をもつ道南杉が使用され、縦方向の目透かし張りによって建物を覆っている。シャープな軒線がスカイラインを際立たせ、祭壇背面と泣き部屋のヴォリュームは、キャンティレバーによって地盤面から浮いている。空間の広がりを内部にたたえた聖堂が、抽象化された外観を伴いながら、住宅地の中にコンパクトで軽快な姿で立ち現れている。ここに、設計者の抽象化への注意深く確かな設計手法と、スケールに対する確かな感性を見てとることができる。

信者の寄附によってつくられたこの聖堂は、単にローコストであるだけではない。これまで主に住宅に携わってきた地元工務店による無理のない施工を可能にするために、一部の梁材を除き一般の流通材で軸組を構成する構造計画上の工夫、安価な仕上げ材の選択、信者と学生が協働施工する外壁塗装、職人の手によって精緻に施工された天井面のクロス貼りなど、設計・施工を通じた各工程の様々なレベルにおいて、丁寧かつ行き届いた配慮が行き届いている。本建築作品は、設計者だけではなく、施主・設計者・施工者による高い志、相互理解と協力によって実現に至ったものであり、北海道における建築文化の向上という点から高く評価されるべきものである。

近年、地方の人口縮減に加え、キリスト教信者が減少していると言われる状況において、この聖堂は、教区内に限られた信者のためだけのものではなく、教区を跨いだ信者の利用や、一般住民を対象にした地域の共用空間となるよう積極的に開放されている。また、身廊から900mmあがった床レベルをもつ“泣き部屋”は、一般的な聖堂建築の型には見られないものだが、子供達が、礼拝の場の雰囲気を乱すことなく、大人と同じ視線で安全に礼拝に参加でき、また長時間この聖堂に滞在できることを可能にするオリジナルの設えである。

総じて、厳選された設計手法が綿密にスタディされ、施主・設計者・施工者が協働して作り上げた本建築作品は、簡潔でありながら極めて豊かである。加えてカトリ

ック教会の聖堂であることを超えて、将来に向けた地域における豊かな居住環境とコミュニティ形成への期待を感じさせてくれる点でも評価できるものである。

(文責：小澤丈夫)